

万博とカジノと経済人

6月16日のアベノハルカスでのシンポジウムは、基調講演させてもらった貴重な場であり、私にとっても学ぶことが多かった。写真は「大阪を知り・考える市民の会」代表の中野雅司さん。今年2月22日中野さんへの「ロングインタビュー」をレポートしている。フェイスブック仲間であり、こうしてシンポジウムで一緒でき、本当に嬉しかった。大阪の生粋の経済人として、中野さんが報告で語ったことを抜粋して紹介したい。



中野雅司さん

大阪の中小企業の三代目の立場から、愛する大阪が良くなってほしいという視点で話したい。

万博を考える上で大切なのが、今沈滞している大阪経済を活性化できるきっかけになるのかどうかだ。大阪経済の課題は、人や企業が流入し産業を興していく、新しい街づくりにほかならない。集客だけ目的とするのであれば、すでにインバウンドなどで進展している。今必要なのは新しい経済の担い手と産業を生み出す、大阪をどうやって作っていくかだ。

万博を行なうのであれば、新しい大阪と街づくりの方向性を示唆できる内容でなくては、大阪で開催する意味は薄い。とってつけたようなテーマ設定で、単なる客寄せの、イベントになってしまいそうなのは、万博が「維新」お得意のカモフラージュだからだ。本命はカジノ誘致であり、万博を本当の意味での大阪再生の起爆剤にするという考えに至らないのだろう。

2045年はシンギュラリティ(技術的特異点)の年といわれ、人工知能が発達し、人間の生活に大きな変化が起こればと考えられる。2025年は、この変化が起これ始めている真っ最中である。その影響は、大阪の真骨頂であるモノづくりにも大きな変化を及ぼすだろう。万博を開催するのなら、こうした変化の潮流に対応したものこそ求められよう。防災面からみて、万博の会場は甚だ疑問。大規模な地震が続くなかで、わざわざ危険な海のそばに、しかも連絡経路も貧弱な人工島で3000万人もの人を呼ぼうとするのは、いかなるものか。招致する側の責任というもの、当然あると思う。

カジノは絶対反対。大阪の経済再生という視点からも反対。なぜならカジノのようなものを導入することで、大阪商人の心がむしばまれてしまうから。カジノを招致したいと表明している一部の関西経済人は、“あきんど”の心を失ってしまっているのではないか。浪速商人の心こそが、大阪の経済成長を支えてきたバックボーン。博打場を作ろうとすることは、商人自らが、その大切なものを投げ捨てる行為に等しい暴挙ではないだろうか。「人を大切にする経営」を忘れ、「商人道」を踏み外したら、商都大阪の復活はありえない。“なにわのあきんど”の心と真逆のカジノを、どうして大阪の商人が賛成できるのでしょうか?

(2018年6月20日)